

農業・水と祭り

『地蔵への信仰が原点』 - つくりもんまつり -
富山県福岡町 / 岡村 直樹



大地の恵みである野菜や果物がオリンピック選手や城、火の見櫓に変身！ - 毎年9月23、24日の両日、富山県高岡市の西隣に位置する福岡町で開かれる「つくりもんまつり」は、素朴かつユーモアあふれる庶民芸術として全国に名をはせる。

目や鼻、口をつけられて人形風に仕立てられた野菜や果物は、今にも言葉を発し、動き出しそうだ。往年の連続テレビ人形劇「チロリン村とくるみの木」(昭和31~38年)そのこの、珍騒動が巻き起こるかと思えてくる。

「-くるみの木」では、クルミのクル子、タマネギのトンペイ、ピーナッツのピー子をはじめと

する個性的なキャラクターが大活躍した。「つくりもんまつり」を彩る野菜や果物も、「-くるみの木」に負けず劣らず多彩だ。2004年の出品数は43点。町内中心部のそこかしこに展示された作品は、道行く見物客の熱いまなざしを注がれ、誇らし気である。

2004年の9月下旬といえば、アテネオリンピックの余韻さめやらぬ時期だ。末広町、橋上町、清水町などの各町、特別養護老人ホーム、小学校などが出品した作品は、オリンピックにちなんだものが目立った。

「夢の競演」と題する作品は、柔道の谷亮子、卓球の福原愛の両選手が卓球で対戦する様子をかたどった。2千個のシジミ貝を並べてつくった卓球台をはさんで、顔はカボチャ、毛髪は稲穂で制作された両選手が、段ボールにトウガラシとインゲンを貼りつけたラケットを握ってラリーの応酬 - といった具合なのである。

福岡小学校3年生の133人が力を合わせた「フレイフレイ 動物たちのオリンピック」は、学校の畑で丹精こめたジャンボカボチャやヒョウタンを素材としている。

まつりの期日は秋の彼岸に当たる。「暑さ寒さも彼岸まで」というが、この時期は夏と秋の端境期だ。朝晩は秋めいてきたとはいっても、日中はまだまだ夏の名残りをとどめている。2004年は、まつりの前の1週間ほど気温が高めに推移した。気温が高いと野菜や果物が傷みやすく、2日前まで加工を控えるなど、作り手は細心の注意を払って仕上げた、という。

*

*

*

富山県の祭りの特色の一つは、地蔵まつり(地蔵盆)が県内一円に多数伝承されている点だろう。富山市以西の市町村に濃厚に分布しており、氷見市や八尾町などで盛大に行われている。

地蔵は本来インドに起こり、日本には奈良時代に伝わったとされる。地蔵菩薩は、

冥土行きの者を救い、とくに子供を守護すると信じられた。地方へは平安時代末期に普及しはじめ、江戸時代初期に地蔵盆、地蔵祭りが広まっていった。富山県下のそれも江戸時代に普及し、8月23、24日に行われるケースが多かった。

「つくりもんまつり」も、この地蔵祭りに起源を持つ。お盆から8月いっぱいにかけて、村の青年団や子供たちが辻々の地蔵を一軒の家に移し、餅や果物、野菜をお供えた。この祭りは、やがて五穀豊穡に感謝して秋の収穫物を供え、それが年月をへるうちに「つくりもんまつり」として定着していった。

地蔵祭り（地蔵盆）は、所によっては男児だけの行事とされていたらしい。寺の近くに祀ってある地蔵前に大人たちが簡素な土台をしつらえ、季節の野菜（スイカ、トマト、ナスなど）を供えて、後は子供に任せる。

子供たちは、寺への参拝者が来ると「ゴショーコーオネガイシマース、ゴショーコオマイリネガイマース」と口々に唱え、鐘を打ち鳴らしながら賽銭箱に金を入れてもらう。これは祭りの費用に充てたという。

高岡市中田でも、8月23日夜から24日にかけて、町内の店を借りて、子供たちが地蔵祭りの祭壇をつくり、のぼり旗をあげ、夜高行灯を飾る。そして夜っぴて祭りをつづける。果物、野菜、餅などを供え、僧侶に読経してもらう。しかるのちに、法話を聞く。僧は尼さんが多かった。さらに、互いにご馳走をふるまい合う。

古くは信仰心、下って「稔り多かれ」と願う気持ちに発した祭りも、今日ではやや観光行事化した感があるにはある。それでも、岸渡川（小矢部川支流）に架かる福岡橋畔の地蔵は、町民の信心深さを伝えて余りある。常日頃は、近所の老婦人らが世話しているが、祭りの日には祭壇が築かれ、サツマイモ、タマネギ、ナシ、ピーマンなどが供えられる。通りかかった人々が、両手を合わせて祈りをささげては去っていく。

陽ざしが衰え、軒下に暮色が漂いはじめると、家々の行灯に灯が入る。子供たちがつくった手づくりの行灯だ。「つくりもんまつり」が、夜通しの地蔵祭りに原点を持つことを思い起こさせる時刻がやってきたのだ。

*

*

*

富山県の平野部は、川が運んだ大量の土砂によって形づくられてきた。そこに住まう人々は、同時に川の脅威と闘いつつ農地を広げてきたのである。福岡町も例外ではない。

福岡町は小矢部川と庄川の複合扇状地である礪波平野の末端にあたり、自然湧水地帯である。町内の清水町に湧く「殿様清水」がその典型だ。人々に恩恵をもたらした小矢部川は、一方でしばしば氾濫した。氾濫原は江戸期になってさかんに開墾されたが、あちらこちらに“フコ”と呼ばれる沼地ができ、一部は昭和に入っても残っていた。

こうした沼地には野生の菅が繁茂しており、農家ではこれを材料に菅笠をつくった。刈り取った菅は、土用の暑いさかりに10日間ほど乾燥させる。干し場は広い面積を要するため、これまた小矢部川の河原が利用された。福岡町の菅笠の生産量は、現在でも全国の90%を占める。

「つくりもんまつり」にも、菅笠地蔵が出品されていた。菅笠を頭上にいただいた6体の地蔵さんが、足元に敷きつめられた稲穂をやさしげに見守っている。

ススキとともに供えられた彼岸花がひとときわ赤かった。

(旅行作家)

つくりもん祭り問い合わせ先 / 福岡町観光協会・電話(0766)64・5333